

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03239

研究課題名（和文）発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療によるアウトリーチ型協働支援モデルの構築

研究課題名（英文）Development of a model for outreach-type collaborative support by education, psychology, and medicine for children with developmental disabilities

研究代表者

山口 豊一（Yamaguchi, Toyokazu）

聖徳大学・心理・福祉学部・教授

研究者番号：10348154

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は心理職と医師が幼稚園に赴き、幼稚園の担任教諭と協働して発達障害傾向のある子どもの早期発見・介入を目指し、問題を包括的・効率的に解決するためのモデルを構築することである。

研究1では担任教諭や園長、保護者と面談し、発達障害傾向のある子どもの早期発見・早期介入を実現し、子どもや園や家庭が持つ課題を最も効率的に解決するための多職種協働型支援モデルを構築する試みを行い、研究2では、親の会へ参加し、専門家が保護者や幼稚園教諭とどのように関わり、何が生じているのかについて検討し、心理職、医師による保護者と幼稚園教諭へのコンサルテーションにおける影響関係と相互作用を明らかにする試みを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究チームは、2019年より科学研究費助成事業の助成を受け、幼稚園における教育・心理・医療によるアウトリーチ型多職種協働支援モデルを構築している。このモデルを小学校でも活用することで、子どもの発達を教育・心理・医療面からカバーした教育現場における協働体制を作り、発達障害傾向のある子どもに早期発見・介入することで、子どもが本来持つ能力を十分に発揮した学校への適応が期待でき、教育現場で起こる問題への解決に結びつくのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to construct a model for the early detection and intervention of children with developmental disabilities and to solve their problems comprehensively and efficiently by having psychologists and doctors visit kindergarten and collaborate with kindergarten teachers.

In Study 1, we interviewed teachers, principals, and parents to realize early detection and intervention for children with developmental disabilities, and attempted to construct a multidisciplinary collaborative support model to solve the problems of children, preschools, and families in the most efficient manner. Study 2 attempted to clarify the influence relationship and interaction in consultation with parents and kindergarten teachers by psychologists and doctors by examining how professionals interact with parents and kindergarten teachers at parents meetings and what occurs.

研究分野：学校心理学・臨床心理学

キーワード：アウトリーチ型支援 発達障害 アウトリーチ型多職種協働支援モデル 多職種連携 オンライン コンサルテーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

文部科学省が2022年発表した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」において、小・中学校で「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒の割合が2012年の6.5%から推定値8.8%に増加していることが明らかになった。さらに、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒のうち特別な教育的支援が必要と判断と判断されている割合が28.7%であることも併せて明らかになっている。発達障害傾向が認められる児童生徒が増加する中で、教職員と心理職、教育(学校)と医療といった2者間での連携は行われるようになってきたが、近年では教育職・心理職・医療職が連携して対応する協働支援の重要性が認識され始めている。一方で専門性の異なる3職種が協働して子どもの支援にあたる方略は確立されておらず、実践的な研究はまだ少ない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教育・心理・医療によるアウトリーチ型多職種協働支援モデルを構築することである。具体的には、心理職と小児科医が小学校に赴き(アウトリーチする:訪問する)、小学校の担任教諭と協働して発達障害傾向のある子どもの早期発見・介入を目指し、問題を包括的かつ効率的に解決するためのモデルを構築する。

本研究で提案する「教育・心理・医療の協働体制」の学術的独自性は以下の3点にある。

現実に即した迅速な助言ができる

医師や心理職が対象児の在籍する教育現場に赴く(アウトリーチする:訪問する)ことで、日常生活での状況を的確に把握でき、正確なアセスメントと実質的、現実的な助言が可能になる。

行政との連携で地域内の子どもを漏れなく対象にできる

研究代表者および研究分担者の勤務地域の教育委員会より地域の全公立小学校から上がってくる対象児の情報に基づき、本申請研究チームが効率よく介入できる。

複数回のアウトリーチで効果の増強を図れる

定期的な複数回の介入で、具体的で実現可能な目標設定を置くことが可能となり、対象児により効果的な支援を行うことができる。

また本研究の創造性は、以下の2点が考えられる。

新しい発達障害支援モデルの提示

心理職と医師の連携チームで学校現場に赴くことで、教職員や保護者が心理職と医師の統一された助言を受けることができる。

インクルーシブ教育への貢献

新たな教育・心理・医学的アプローチ法を提示することで、増加する発達障害傾向のある子どもに対するインクルーシブ教育のさらなる実現に貢献する。

3. 研究の方法

教育委員会による公立小学校における発達障害傾向児のリクルート

リクルートと小学校との連絡調整は、松戸市教育委員会に依頼する。

発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療によるアウトリーチ型共同支援モデルの構築 研究実施スケジュール

	2024年度		2025年度		2026年度	
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期
支援会議	(初回)	(第2回)	(第3回)	(第4回)	(第5回)	(最終)
【研究課題1】 松戸市教育委員会による 市内小学校の発達障害 傾向児のリクルート	第1期リクルート 対象:小学校低 学年 [(研究協力 者 石井, 保田)]		第2期リクルート 対象:未就学 児 [(研究協力 者 石井, 保田)]		第3期リクルート 対象:未就学 児 [(研究協力 者 石井, 保田)]	
【研究課題2】 対象児の観察	第1期対象児 [(山口, 宮川, 田中)]		第2期対象児 [(山口, 宮川, 田中)]		第3期対象児 [(山口, 宮川, 田中)]	
【研究課題3】 介入方針の策定と評価	第1期対象児 [(山口, 宮川, 田中)]		第2期対象児 [(山口, 宮川, 田中)]		第3期対象児 [(山口, 宮川, 田中)]	
【研究課題4】 適応行動検査の実施	△ 策定 プレ検査 (山口)	評価	評価	評価	評価	最終評価 ポスト検査
情報収集・成果発表		国内学会		国内学会		国内学会

2024年度から2026年度上半期（6ヶ月間）までの計3回（第1期から第4期）で小学校における発達障害傾向のある子どもを抽出する。

対象児の観察

で抽出された対象児が在籍する小学校に定期的に赴き、担任教諭の下で対象児の行動観察を継続して行う（山口，松寄，田中，宮川）。なお，第1期から第3期で抽出された数名～30名の対象児は，抽出された時点から2026年上半期まで継続した定期的な観察を行う。

介入方針の策定と評価

チーム支援会議の開催（プレ検査）

と並行して順次，対象児の在籍する小学校に赴き，担任教諭と保護者を交えたチーム会議を開始する（山口，田中，宮川）。その際に，Vineland-II 適応行動尺度（適応行動の発達水準を幅広く捉え，支援計画作成に役立つ），小学生版 QOL 尺度親用（児童の生活の質を測る）を用いて介入前の対象児の行動評価（プレ検査）を実施する（山口，松寄）。対象児が知能検査を受検したことがない場合は知能検査も併せて実施する（飯田）。必要であれば，保護者に対し医療機関の紹介を行う（宮川，田中）。

適応行動検査の実施

対象児の行動等の問題が解決した（例：離席回数が減った）と担当教諭あるいは保護者が判断したところで観察と介入は終了する。その際，Vineland-II 適応行動尺度，小・中学生版 QOL 尺度親用を用いて，介入後の対象児の行動評価（ポスト検査）を実施する（山口，松寄）。問題の解決に至らなかった場合も，研究期間終了1年前には対象児全員のポスト検査を行う。



チーム会議開催イメージ図

4. 研究成果

〔研究1〕発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療による

アウトリーチ型協働支援モデルの構築のための基礎的研究

〔研究1〕では臨床心理士と小児科医がペアで幼稚園を訪問し，対象児の担任教諭や園長，保護者と面談し，発達障害傾向のある子どもの早期発見ならびに早期介入を実現するための，多職種協働型支援モデルの構築を試みた。子どもや園や家庭が有する課題を最も効率的に解決することができると思う。

発達障害傾向のある園児に対して検査や行動観察を行い，それによる見立てを幼稚園の園長や教諭，そして保護者にフィードバックを行った。その後，フィードバックの場面で得られた語りについて，KJ法を援用してまとめた。その結果，『支援者への肯定的評価』『検査中の行動観察』『専門的視点』『対話の機会』『幼稚園の方針の理解』『展開』という6つの大分類にまとめることができた。そこで，KJ法を援用してまとめられた分類をもとに，本研究で行ったようなアウトリーチ型協働支援が機能する要因について，仮説的なモデルを作成した。

その結果，臨床心理士並びに医師の人柄や，こちらから出向くという積極性が，組織に好印象を与えていることが明らかとなった。そして，組織からの信頼を得ることにより，その組織を信頼する人々，今回の場合で言えば園児の保護者からの信頼を得ることにつながった。そして，検査自体がスムーズに行われ，また結果のフィードバックや保護者とのコミュニケーションが円滑になることが明らかとなった。

〔研究2〕発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療による

アウトリーチ型他職種共同支援モデル構築のための基礎的研究

心理職・医師によるオンライン型コンサルテーション支援を通して

〔研究2〕では心理職ならびに医師がペアで発達障害傾向が認められる児童生徒の親の会へ参加し，専門家が保護者や幼稚園教諭とどのように関わり，その結果，保護者や幼稚園教諭に何が生じているのかについて検討し，心理職，医師による保護者と幼稚園教諭へのコンサルテーションにおける影響関係と相互作用を明らかにすることを目的とした。本研究により，アウトリーチ型多職種連携支援モデル構築の一助になると考えられる。

研究者が過去にA幼稚園を訪問し，発達障害傾向が認められる児童生徒に対して知能検査や行動観察を実施し，それによる見立てや支援方法を保護者と幼稚園教諭へフィードバックを実施するなど関わりを持っている関東圏のA幼稚園を対象に親の会へ参加し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を用いた。

その結果，心理職ならびに医師の2名の専門家が，発達障害傾向がみられる児童生徒もつ親の会へ参加し＜専門的視点＞を提供するという働きかけが，＜専門家が参加する利点＞を生じさせるために重要であることが示唆された。また，“間接的表現の使用”や“話題設定”は＜保護者の悩み＞が話しやすくなる等の影響を及ぼし，親の会の質を向上させる可能性が考えられた。

今後，継続的に専門家が親の会へ参加し，会ごとのテーマ設定や間接的表現を用いることによって，どのような影響があるか検討していく必要が推察された。

引用文献

木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い，弘文堂．

木下康仁（2007）ライブ講義 M GTA 実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて，弘文堂．

久保田健夫・山口豊一・腰川一恵（2021）発達が気になる子へのアウトリーチ型支援 医師・心理士の協働による早期保育支援モデル，岩崎学術出版社．

日本文化科学社氏原寛（2006）心理査定実践ハンドブック，創元社

日本LD学会（2016）発達障害辞典，丸善出版

日本精神神経学会（2014）DSM- 5，医学書院

文部科学省（2012）通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/icsFiles/afiedfile/2012/12/10/1328729_01.pdf（2021年7月9日閲覧）．

齊藤環（2020）オープンダイアログが開く精神科医療，日本評論社．

上野一彦（2014）WISC- による心理的アセスメント

上野一彦ら（2015）日本語版 WISC- による発達障害のアセスメント 代表的な指標パターンの解釈と事例紹介，日本文化学社

山口豊一・久保田健夫（2019），発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療によるアウトリーチ型協働支援モデルの構築のための基礎的研究．研究助成論文集，54，1-8．

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山口豊一、松崎くみ子、宇津木美樹、上村佳代	4. 巻 19
2. 論文標題 発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療によるアウトリーチ型協働支援モデルの構築のための基礎的研究ー心理職・医師によるオンライン型コンサルテーション支援を通してー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口豊一・白土太一・富島大樹・宇津木美樹・松崎くみ子・上村佳代	4. 巻 4
2. 論文標題 授業における若手教師の4種類のサポートに関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口 豊一、富島 大樹	4. 巻 20
2. 論文標題 大学の心理教育相談所における新型コロナウイルス感染予防対策に関わる心理的プロセス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校心理学研究	6. 最初と最後の頁 171～177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24583/jjspedit.20.2_171	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長久 真理子、山口 豊一	4. 巻 24
2. 論文標題 小学生・中学生・高校生における被援助志向性研究の動向と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 51～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50841/kyoikujissen.24.0_51	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口 豊一、久保田 健夫	4. 巻 11号
2. 論文標題 心理の専門職と医師の協働による早期発達支援の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教職実践研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山口豊一、宇津木美樹、上村佳代
2. 発表標題 発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療によるアウトリーチ型協働支援モデルの構築のための基礎的研究ー心理職・医師によるオンライン型コンサルテーション支援を通してー
3. 学会等名 日本心理臨床学会第41回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口豊一・宇津木美樹・上村佳代
2. 発表標題 発達障害傾向の子どもへの教育・心理・医療によるアウトリーチ型多職種協働支援モデル構築のための基礎的研究 心理職・医師の発達障害傾向の子どもを持つ親の会への参加を通して
3. 学会等名 一般社団法人日本LD学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保田健夫・山口豊一・新井雅・椎橋克夫・松崎くみ子
2. 発表標題 発達障害傾向を認める子どもに対する教育・心理・医療の協働体制の確立とその評価と展望
3. 学会等名 日本心理臨床学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山口豊一・上村佳代
2. 発表標題 高校生の援助要請と学校適応
3. 学会等名 日本心理臨床学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保田 健夫、山口 豊一、腰川 一恵、松永 智美、松寄 くみ子
2. 発表標題 発達障害に対する臨床心理士と医師の幼稚園巡回訪問体制の確立とその効果 - 発達障害の早期介入効果を高める新支援モデル -
3. 学会等名 日本心理臨床学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山口豊一、久保田健夫、松寄くみ子
2. 発表標題 発達障害の臨床心理士と医師の協働によるアウトリーチ型早期介入：臨床心理士の立場から
3. 学会等名 日本子ども健康科学学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 野島一彦、繁榎算男監修 野島一彦編 第3章 山口豊一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 205
3. 書名 公認心理師の基礎と実践 [第1巻] 公認心理師の職責 第2版 第3章 クライアント/患者らの安全の確保のために 心理に関する支援を要する者等の安全の確保	

1. 著者名 久保田 健夫、山口 豊一、腰川 一恵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩崎学術出版社	5. 総ページ数 268
3. 書名 発達が気になる子へのアウトリーチ型支援	

1. 著者名 山口 豊一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 160
3. 書名 学校心理学の理論から創る生徒指導と進路指導・キャリア教育	

1. 著者名 下山 晴彦、佐藤 隆夫、本郷 一夫、小野瀬 雅人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 192
3. 書名 教育・学校心理学	

1. 著者名 久保田 健夫、山口 豊一、越川 一恵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩崎学術出版社	5. 総ページ数 250
3. 書名 発達が気になる子へのアウトリーチ型支援 医師・心理士の協働による早期保育支援モデル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松崎 くみ子 (Matsuzaki Kumiko) (30181712)	跡見学園女子大学・心理学部・教授 (32401)	
研究分担者	田中 大介 (Tanaka Daisuke) (30296983)	昭和大学・保健医療学部・教授 (32622)	
研究分担者	久保田 健夫 (Kubota Takeo) (70293511)	聖徳大学・児童学部・教授 (32517)	
研究分担者	原田 正平 (Harada Syouhei) (70392503)	聖徳大学・児童学部・教授 (32517)	
研究分担者	飯田 順子 (Iida Junko) (90383463)	筑波大学・人間系・准教授 (12102)	
研究分担者	宮川 三平 (Miyakawa Sanpei) (50110937)	聖徳大学・教育学部・教授 (32517)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------